

# 白百合の剣士

仮面姫ブリジット

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 筑摩十幸

挿絵 助三郎

第一章

白き剣士

006

第二章

処女を狂わす魔液

047

第三章

白昼の淫惨夢

104

第四章

淫姫奴隸

181

## 登場人物紹介

Characters



### ブリジット・ローゼンバーグ

ランドール王国の第一王女でありながら、仮面をまとい「白百合の剣士」として奴隷商人と戦う、金髪碧眼の少女。

### メイ

第一王女お付きの侍女で、唯一、白百合の剣士の正体を知る娘。主であるブリジットに健気に尽くす。

### レイラ

ブリジットとは腹違いの姉にあたる第二王女。腰まである銀髪と泣きぼくろが妖艶な女性。

### バスク

ランドールで活動を行う奴隷商。一流の調教技術をもつ男。

### クレイド

警察任務を行うランドール治安局の局長。でっぷりと太った体躯の持ち主。

視姦による羞恥、破裂しそうなほど膨らんだ乳頭とクリトリスの甘美な痺れ、さらに鞭打たれる双臀からの激痛がドロドロに混ざりあつて少女剣士の胎内に熔けた鉛のように流れ込んでいく。沈殿する灼熱に爛れた子宮がキュウツと収縮する。新鮮な果物から果汁が搾り出されるように、なにかがトロリと流れ出しそうになって仮面の少女は思わず太腿を閉じ合わせた。

途端にクチュツと粘った感触が卑猥なショーツの底にこぼれて、ブリジットは激しく狼狽する。

(こ、こんなことって……)

その感覚は昨夜、調教中に感じたものと同じだった。縛られ、浣腸され、肛門を淫具で刺られながらの強制排泄。生まれて初めて感じた異常すぎる絶頂体験の爪痕は肉体のみならず、深層心理にも刻み込まれていたのだ。

自分はもうその感覚から一生逃れられないのかもしれない。ブリジットは恐ろしい予感に総身をわななかせた。

『公開調教』の場所にたどり着いたときには、太陽はかなりの高度に達していた。

そこは壁に囲まれた小さな広場のようなどころだった。噂を聞きつけたのか、五十人近い観衆が集まっている。いずれも卑猥な期待に満ちた視線で、広場の中央ステージに後ろ



手に起立させられた哀れな仮面の少女を見つめていた。

男たちの無数の視線を浴びて、それまで、どこかトロンとしていた少女剣士の表情が強張っていく。深い夢から急に覚めたように盛んにしばたかせる瞳には、精悍なマスクでも隠しきれない明らかな動揺が浮かんでいる。

「お前たち、この奴隷を知っているだろう？ ブロンドと青い瞳、そしてこの仮面に見覚えはないか？」

バスクの声に観衆たちはざわめき始めた。

「もう少しわかりやすくするか」

ニヤリと嗤うといきなりマントを掻き広げた。

「きやああっ！」

たまらず仮面の少女が悲鳴を上げる。鎖を引かれてしゃがむことも許されず、陽光を浴びた輝くような白い裸身がさらけ出された。

(み……見られた……)

視線が無数の矢のように身体を貫く。無視しようとしてもしきれない圧倒的な羞恥が押し寄せて心臓がキリキリ痛んだ。

マントの中、身体にまとわりついていた熱気が拡散され、かわって静電気のようなビリビリと痺れる感覚が素肌を覆っていく。金縛りにあったように動けず、その姿は宮殿を飾

る美しい彫像のようでもあった。

形よく上向いた乳房が汗を反射してキラキラ光っていた。その頂点で硬く勃起させられてしまった乳首が真っ赤に色づいている。

無駄な脂肪と縁のない見事にくびれた腰と、対照的に早熟な色気を感じさせるヒップをつなぐ芸術的なウエストライン。

そして最も視線の集中する少女の聖域は、蝶をかたどった卑猥なデザインのショーツが覆っている。中央に輝く宝石の色は少女の秘密を映して妖しく輝き、金色のヘアを透かせるピンク色の妖蝶が貼りつく恥丘は、こんもり盛り上がって、その下の淫裂の形までも浮かび上がらせていた。

しかしそれ以外の身につけているモノは、奴隷少女には似つかわしくない『装備』だった。白い手袋やブーツは、洗練されているが戦闘用のものだろう。さらに腰には赤い帯剣ベルトが巻かれレイピアまで装着されている。そのレイピアの百合の花の装飾、そして謎めいた青い仮面……。

観衆のざわめきが、微妙に色合いを変える。おそらく何人かは目の前の虜囚の正体に気づいている。だがそれを口に出すのはためらわれた。まさか、そんなはずはないという気持ち、そうであって欲しくないという気持ち判断力を鈍らせているのだ。なんとももどかしい空気が漂い始めたとき、

「し、白百合の剣士様!」

幼い少女が悲鳴混じりの声を上げた。全員が声の主を見つめ、ブリジットもハッとしたりのように顔を上げた。その幼い女の子には見覚えがある。彼女はいつか奴隷商人から助けた少女に違いなかった。悲しみを湛えた瞳が自分を見つめてくるのが痛いほどわかる。

その瞬間、ブリジットの中で今までこらえていた羞恥の波が、つま先から頭へと一気に駆け上がってきた。

「い、いやあつ! 見ないでっ! 見てはダメッ!」

絶叫して、後ろ手に拘束された裸身を悶えさせる。

剣士としての自分を尊敬し慕っている少女に、今のあまりにも惨めな醜態を晒すのは耐え難い屈辱だった。

「……どうして……どうして……こんなことに」

小さな身体を震わせて、とうとう泣き出してしまう少女。囚われの剣士のことを思うあまりの涙が、皮肉にも周囲の男たちに、仮面をつけた奴隷少女がああ白百合の剣士なのだと確信させることになってしまった。

「ああ……」

ブリジットの首がガクリと折れた。悔しさを滲ませた碧眼にうっすらと涙が浮かぶ。白百合の剣士が見せる初めての涙。奴隷商人を何度も怯ませたあの強靱な精神力にも、ほこ



ろびが出始めていた。

「ふふふ。涙のご対面だな。正解のご褒美にお嬢ちゃんも一緒に調教を受けてみるか？」  
バスクにからかわれると、少女は真っ青になり、悲痛な泣き声を上げながら人混みの中に消えていった。

一瞬の静寂のあと、広場は再びざわめきに包まれる。

「本当に、あの白百合の剣士なのか」

「俺も少しだけ見たことがある。多分、間違いないだろう」

「そんな馬鹿な……偽物に決まってる」

「かわいそうに、とうとう捕まってしまったんだな」

「なんてことだ……非道い目に遭わされるぞ、きつと」

奴隷少女の正体を知ったせいか雰囲気が変わっている。絶望と同情が混ざったような空気が漂い始めた。

「わかったか。お前たちの憧れた白百合の剣士は、この俺、奴隷商人バスクの手落ちた。今から正義の剣士様が淫乱な肉奴隷に堕ちるところを見せてやるぜ」

高らかに宣言する奴隷商人の声が広場に響き渡った。

「では、そろそろ始めるかな、奴隷剣士様」

バスクはブリジットの背後から両手を乳房に伸ばしてきた。

「……や、やめなさいっ……ううっ……それ以上したら、絶対許さないからっ！」

領民の前ということもあり、精一杯の虚勢を見せる仮面の少女。

それを嘲笑うように奴隷商人は下から乳脂肪をすくい取るように掌で双乳を持ち上げる。初々しい感触がプルンと手の中で踊る。

「いいか、下手な真似をしたらこいつらを二、三人殺すからな」

うなじに舌を這わせながら、恐ろしい脅迫の言葉を愛撫の甘い息づかいで言っただけのける。  
「くっ……卑劣な」

白百合の剣士は無念そうに唇を噛んだ。目の前に群れをなす男たちは羞恥心を煽ってくる観衆であり、同時に守るべき人質でもあるのだ。これでは隙を見て逃げ出すことも困難だろう。

「まず、脚を広げる。それから目を閉じるな。前を見ておけ」

指示に従ってゆっくり肩幅くらいまで広げた。

「もつとだ」

「くっ」

羞恥に耐えながらさらに倍くらいまで広げると、奴隷商人は納得したように次の指示を出す。  
「そのままゆっくり腰を落とせ」

それがどういう結果をもたらすか、どれほど破廉恥なポーズになってしまうか容易に想像できた。さらに水晶レンズに包皮を剥かれた肉芽の様子まで映し出されているのだ。それを領民に見られるのは死ぬほど恥づかしい。そしてその視線に自分の肉体があさましく反応してしまうのではないかと思うと、恐ろしくて歯がカチカチ鳴った。

「あう……」

肉体の痛みと、魂を驚掴みにされたような衝撃が交錯しブリジットの判断力を鈍らせる。「なにもかもさらけ出せ。領民を守るのがお前の務めだろう」

頑なな少女剣士の心に与えられた巧みな言い訳が、ブリジットを被虐の迷宮へと誘う。催眠術にかかったように腰がオズオズと下がり始めた。それにつれて膝は外向きに広がり、ついにガニ股の大開脚ポーズが完成する。

「ああ……」

思わず漏れる熱い吐息。

乙女の高めの土手をこれでもかと思せつけられて、観衆はしんと静まりかえった。透け見えるブロードの陰毛が妖蝶に金糸の刺繍を施したようにキラキラ光り、水晶レンズには銀の脚に装飾された少女の真珠が濡れて映っている。

普通なら下品極まりないアクセサリーも、気品漂う少女剣士が身につけていると、前衛

的な美術品へと昇華してしまう。

観衆も妖蝶の仕掛けに気づき始めたようで、水晶レンズに視線が殺到し始める。

「あの水晶は、ひよつとして向こうが見えているんじゃないか」

「本当か？　だとしたらあそこに見えるのは……」

そんな会話まで聞こえてきて、仮面の美少女を抜き差しならない状況に追い込んでいく。

（は、恥ずかしい……人前でこんなことさせられるなんて……）

見つめられるクリトリスが灼熱した。レンズを通して、身体の奥まで暴かれていくような気がして、仮面が密着している頬肉が熔け落ちてしまいそうなほど熱くなる。

しかし奴隷商人の要求はそれだけでは済まなかった。

「腰を前後に振れ」

恥ずかしすぎる命令に、目の前が暗くなった。

（そんなこと……できない）

白百合の剣士は弱々しく頭を振る。これ以上の羞恥にはとても耐えられそうにない。

「命令に逆らえばどうなるか……わかつているなら腰を振れ。思い切りいやらしくな。剣士様のクリちゃんはどうなっているか見せつけてやるんだ」

非情に命じながら、バスクは乳房をねちっこく揉み込む。浅黒い指の間にむにゅと搾り出される柔らかかな真つ白な乳肉。さらに観衆に見せつけるようにして、ゆっくり大きな

円を描くように双乳を弄ぶ。

両側から二つの果実を寄せるように押し潰し、くつきり深い谷間を形作る。その谷間に沿うよう内側から鎖骨に触れんばかりに持ち上げ、そこから左右に開いて重量感を掌に染しみながら下へ降ろしていく。

「う、うう……」

じっくりと少女の硬さを揉みほぐすような絶妙の指の動きが、少しずつ少女剣士の情感を溶かし始め、開脚の腰がゆっくり前後に揺れ始める。

そうすると妖蝶の脚がますます陰核に食い込んで、レンズ越しの少女の真珠は一層大きく映し出されてしまった。

「ふふふ。いいぞ。白百合の剣士様は腰振りダンスもお得意のようだな」

バスクは囁きながら仮面の少女の耳を囁んだ。

「うああ……っ」

奴隷商人の愛撫を避けるように、ブリジットは仮面の上からもハッキリわかるほど上気した顔をねじ曲げて爛れた息を吐き出した。

高貴な正義の剣士が卑猥なショウのダンサーのように妖しく腰をくねらせるのを見て、観衆の目つきが明らかに変わっていた。

淫らな期待に満ちた淫蕩な雰囲気は少しずつ広がっていく。

期待に應えるように男の指は激しく乳房を揉み立てるのだが、一方で恥ずかしいほど勃  
起してしまった乳首にはなぜかほとんど触れてこない。指先は白い乳肌と桜色の乳輪の境  
目付近をくすぐり続けるばかりで、それ以上責めてくる様子はなかった。

(じ、焦らされてる……?)

ついさっきまでマントで擦られていたため、その鋭い快感は身体が、乳首が覚えてしま  
っている。真っ赤に充血した先端は触れられてもいないのにジンジン疼いている。下腹に  
渦巻く滾るような熱波もそれに拍車をかけた。

「くくく、みんなが白百合の剣士様のおっぱいを見ているぜ。このいやらしいピンピンの  
乳首をな」

絶えずキスの雨を降らされて鳥肌立ったうなじに、ぬるりと舌が這う。

「あうっ」

ゾクッと背筋が震えた。言われるまでもなく、ゆっくり揉み込まれ様々に形を変える乳  
白色の塊に、その頂点で大きく円を描き続ける乳頭に五十人分の視線が突き刺さっている  
のは肌を感じ取っていた。

そして観衆は期待しているのだ。赤く尖りきった乳首が男の指で弄ばれるのを。そのと  
き仮面の美少女がどんな表情を浮かべるのかを。

(どうして……わたし……みんなのために、今まで……)

領民から欲望にぎらついた目で見つめられると、どうしようもなく哀しい気持ちがかみ上げてきた。心の中でなにかが剥がれ落ちる気がした。

自分のしてきたことは一体なんだったのか………。

(だ、だめよ！ そんなこと考えては！ このままじゃ奴隷商人の思うつぼよ！)

一瞬胸をよぎる捨て鉢な気持ちを振り払う。心の支えを失えば、後は手練れの奴隷商人によってあつという間に陥落させられてしまうのは目に見えていた。

「考えごとをしている暇はないぜ」

心の隙を見透かしたようにバスクの指がいきなり二つの乳首を摘んできた。

「きひいいい！」

金属的な悲鳴を上げて仰け反る少女剣士。ブロンドのポニーテールが激しくうねる。

「どうだ？ 気持ちいいか？」

「んああああっ！ やめてっ！」

親指と人差し指で敏感すぎる神経をコリコリと転がされて、仰け反っていた顎がさらに上向いた。白々とさらけ出された喉元に奴隷商人の蛇のように長い舌が這い回る。男の煙草臭い息や生々しい唾液の匂いを吸い込むと汚辱感で頭がクラクラした。

蹴られてますます硬く膨らんでしまった乳頭を、付け根から先端に向かつてしごき立てられた。シュツシュツと擦られて、二カ所で発生した高圧電流のような快感が心臓にぶ

つかってひとつになる。その刺激は下腹に伝搬し、妖蝶に取りつかれ淫らなダンスを強要される柔腰が、さらに妖しくくねってしまふ。腰のレイピアがカチャカチャと揺れた。

「いやっ！ 触るなっ！ ああっ……もう……触らないでっ！」

『女』の反応を引きずり出され、少女剣士の声もどこか弱々しい。鮮やかだった仮面の青色も、少女の汗と脂を少しずつ吸い込んで、くすんだ群青色に染まりつつある。

正義感に燃えていた剣士の陥落寸前の姿が生み出すカタルシスに、観衆の目は釘付けになった。

「気持ちいいかと聞いているんだぞ」

乳頭を齧っていた指に力がこもる。万力のようにゆつくりと、非情なまでに押し潰される。

「あぐううっ！ 痛いっ！」

敏感になっていくだけに痛みも大きく、背中に拘束された手が白くなるほど強く握られる。やがて少女が耐え得る限界一步手前で指の動きは止まったが、圧力はそのままの状態を維持されている。

「痛いのも気持ちいいだろ？」

強く摘まれたままの乳首が今度は上方に向かって引き伸ばされる。

「ひっ、ひっ……」



あまりの苦痛に息すらできず白百合の剣士は口をパクパクさせて喘いだ。全身の筋肉を硬直させて、伸びた身体がつま先立つ。乳頭だけで身体を吊られてしまったようだ。

苦痛と惨めさの涙で霞む視界に、引きちぎられそうなほど無惨な円錐形に変形した自分の乳房が見える。さらに二つの白い隆起の向こうに蠢くギラギラした無数の目線。

(ああ……ひどいっ……そんな目で見ないでっ)

身を焦がすような羞恥、裏切られたような怒りと悲しみが心を引き裂いていく。

その一方で、観衆のそんな劣情を引き出してしまっているのは自分のせいかもしれないという自責の念も浮かんでくる。

(……私がこんな……いやらしい格好しているから……いけないんだ)

領民を恨むまいと思う優しさが、少女剣士をマゾヒズムの陥穽へと誘う。

罪悪感が、贖罪の意識が今の過酷な状況を受け入れようとする。痛みの中に生じる微かな陶酔感。胸の奥でなにかがドロリと蠢いた。

「おっぱいが気持ちいいんだろ？ それを見られて感じているんだろ？」  
耳穴をくすぐるような男の声が熱く囁かれ、乳首がさらに引っ張られた。

「うく……っ」

脳の奥にとろけるような甘い蜜が湧き、ツウ——ッと身体を中心に滴って、女体の奥底、目の光の届かぬところに隠された泉にピチョンと落ちる……。波紋が白い光の輪

となつて闇に広がる。

長い沈黙のあと、少女剣士の顎がほんのわずか、指の幅にも満たない距離でコクッと頷いた。

「くくく」

なにかを確信したようにバスクが嗤った。その直後やつと乳首から指が離れる。

「はあああつ」

乳頭責めから解放された瞬間、シーンと痺れるような感覚が全身に広がって、仮面の剣士はその場にぺたんとしゃがみ込んでしまった。すぐにシヨーツの底がグッシヨリと熱く濡れているのに気がついて、ブリジットは羞恥に身を縮ませる。

白百合の剣士の壮麗な姿に見入っていた観衆から、ふうつと息を吐く音があちこちから聞こえてくる。

※

虚脱した少女と興奮冷めやらぬ観衆を交互に見て、バスクは満足げに頷いた。

「さて、これから白百合の剣士のフェラチオ特訓をするんだが、この中に手伝ってくれる奴はいないか？ 憧れの剣士様がただで奉仕してくれるぜ」

観衆に新たななどよめきが起こった。憧れの美少女剣士の淫らな姿を見せられて、偶像破壊の背徳感めいた昂奮を感じているのは否定できない。しかしだからといって、領民のた

めに日夜闘い続け多くの人を救ってきた救世主に直接手を下す気になれるはずがない。男たちは互いに顔を見合わせながら、表情を窺い合う。

「お前、どうなんだ？」

少し焦れたバスクは、かぶりつき状態で少女剣士に食い入るような視線を送っている。色白の男を指名した。その男は白百合の剣士の熱烈な崇拜者だったが、あまりにも深くのめり込む態度のせいで、周囲から白い目で見られていた。そういった人間の嗜好を見抜くのはバスクの奴隷商人としての一流の勘だろう。

「ほ、本当にいいのか」

色白男の喉がゴクリと鳴った。

「ああ、いいぜ。ただしおさわりはなしだ」

返事を聞くや、その男は素早くステージにより登り、座り込んでいる仮面の少女をジロジロと観察した。その男を見つめる観衆の目には、非難するような妬むような複雑な色が浮かんでいる。

「わかつてるな」という奴隷商人の言葉にブリジットは、明らかな脅迫を感じ取って仮面の表情を強張らせる。

「踵かかとを揃えてしゃがめ。脚は思い切り開くんぞぞ」

脚をもっと開けとか、胸を反らせとか注文と一緒に鞭が飛んでくる。屈辱にまみれなが

ら指示された姿勢をとると、身体のほとんどを目の前の男に晒すことになった。颯られたばかりのほんのりピンク色に染まった双乳、扇情的なショーツに包まれた股間が男の興奮を誘う。あまりの羞恥に内股の筋肉がピクピク痙攣した。

「き、きみは、本当に白百合の剣士なのかい？」

猛った肉棒を慌ただしく取り出しながら、いやらしい笑みを浮かべて男が聞いてくる。その表情には一片の躊躇もなく、嬉々として奴隷商人に協力し、自分を貶めようとしている。真摯に領民のことを思ってきたブリジットにとつて、信じたくない光景であった。

（こ、こんな人でも……私が守らなければ……）

殉教者のような気持ちで覚悟を決める。悲しみをこらえて小さく頷くと、色白男は嬉しそうに嗤って肉棒を突き出した。その醜悪な造形は少女を怯えさせるのに十分だった。

「ああ……」

生まれて初めて見る勃起状態の男根のなんと気味悪いことだろう。毒キノコのように赤黒いカサを広げ、幹には太い血管がのたうっている。すでに相当興奮しているのか生々しい男の匂いがムッと押し寄せてくる。

もちろん知識としては、おおよその外見、機能などは教えられていた。しかし実際目の当たりにするあまりに生物的な構造は、性に対して神聖な畏怖と憧憬を持つ少女にとつては恐怖と驚きの対象でしかない。

フェラチオと言われても、一体どうすればいいのかわからず、仮面が歪むほど思い切り顔をしかめて目を背けてしまった。

明らかな嫌悪を滲ませてとまどう少女の桃のようなお尻に、凌辱の手が伸びる。

「な、なに!？」

驚いて振り向くとバスクが背後から菊薔を窺っているのが見えた。マントが帯剣ベルトに挟み込まれ、度重なる鞭打ちに赤く染まったお尻がさらけ出される。恐ろしいほど敏感になってしまった急所を責められると知って、ブリジットの顔に怯えが浮かぶ。

「や、やめてっ……そこは……お尻はイヤッ!」

「お前はおしゃぶりすることだけ考えていればいいんだ」

ショーツを掻き分けた指が怯え窄まったアヌスを捉える。昨夜の肛門調教が嘘のように可憐な薔は慎ましやかだ。くりくりと円を描くようなマッサージで括約筋を揉みほぐし、中指をズブリと突き立てる。調教の成果か、指先は意外なほどあっさり抵抗をくぐり抜けた。

「あううっ……お、おしゃぶりって……まさか……んああっ!」

ピクンと少女剣士の背筋が反った。指一本の挿入にもかかわらず、湧き上がる快美は炎となつて凄まじい勢いで身体中を駆けめぐる。

「あまり焦らさないでくれよ、剣士様」

肛門責めに悩乱する少女の唇に、欲情した男の肉棒が擦りつけられる。動転した仮面の少女は目を閉じて歯をきつく噛み縛り、それ以上の侵入は拒んだ。

「ううっ」

「舌を出してペロペロ舐めろ」

「いやっ！ そんな不潔なこと、したくないっ!!」

「お前の意見は聞いてないんだよ」

「ふああっ！」

二本目の指がねじ込まれ、有無を言わせない内側からの圧力が少女の口を強引に開かせる。無惨に押し開かれた肛門粘膜から伝わるのはジンジン疼くような熱波だ。

自分の身体がいやらしく造りかえられてしまった事実を突きつけられるのが、たまらなく辛くてブリジットは目をうつすらと開いた。

（こ、これが……男の人の……）

改めて間近で目にする牡の生殖器官に怯えながらも、覚悟を決めて舌を差し出した。しかし桃色の舌先は熱い肉塊に触れるとビクッと逃げるように唇に引っ込んでしまう。

（うう……やな味……でも……が、我慢しなきゃ……）

ゆっくり呼吸を整え、震える舌が再び肉棒に伸びていく。

「お、おい。本当にやるのか」

「やめてくれ。どうして反撃しないんだっ」

観衆が騒然となり、それに応えられない自分が情けなかった。  
惨めさをこらえて、首を傾げる。

クチャ……

舌の先端上面が亀頭部の少し横あたりに触れた。そこからゆっくりとしなりながら上昇する。舌の表面のざらつきに、男性器独特の苦く塩辛い味が溶け込んでくる。ある程度上昇すると舌はくるんと捲れて、肉棒を軽く弾き、陰肉からこそぎ取った不浄の物質を口腔内に搬送する。

憧れの女剣士がどこの馬の骨ともわからない男のペニスに口をつけている。その哀れな敗残の姿を見て、密かに白百合の剣士の反撃を期待していた領民たちの間に暗然とした雰囲気が広がり始めた。

ピチャピチャと湿った水音が静まりかえった広場に響いている。美少女の唾液を塗りつけられた男根がヌラヌラ輝いて、観衆の嫉妬めいた視線を自慢げに浴びていた。

男の劣情を溶かし込んだような味が口中に広がり、少女剣士の顔がおぞましさに歪む。

そんな表情や舌技のぎこちなさがいかに初々しくて、観衆や色白の男の歪んだ興奮を掻き立てた。

「あの白百合の剣士が、俺のモノを舐めているなんて……ううむ、夢みたいだ」

技術はなくとも美少女剣士の舌は、無意識のうちに男の弱点をくすぐってくれる。昂ぶった気持ちを表すように、亀頭の先端に透明の露がジクジクと溢れてきた。

「先っぽも舐めて、綺麗にして差し上げる」  
すかさずバスクの指示が飛ぶ。

「う……んん……っ」

アヌスをこね回してくる二本の指に操られるように、美少女剣士は先端の割れ目に沿って舌を動かし、溢れ出る牡蜜を舐め取っていく。とろけるような舌の愛撫を受けて、勃起ペニスはピクピク震えてさらに亀頭部を膨れ上がらせた。赤紫色の血管が弾けんばかりに脈打ち、濃度を増した、おそらくは精子すらも混じった先走り汁をトロリと吐き出す。

ヌチャヌチャと粘つく触感が舌に絡まり、喉奥に吐き気がこみ上げてくる。

(き、気持ち悪い……でも……みんなのために……我慢しなくては……)

そう思うことで生理的な嫌悪感を克服し、ブリジットは必死に奉仕を続けた。仮面の下に屈辱を滲ませながら桃色の舌をペニスに這わせる。懸命の奉仕で肉棒は妖しくぬめ光り、硬度を増していく。

「そろそろくわえるんだ」

奴隷商人の命令を受けて、白百合の剣士はピクッと震えた。目の前にそびえる肉の凶器。それを口唇に受け入れなければならぬと思うと、屈辱で気が狂いそうだ。



少女が躊躇していると、指にかわって冷たく硬いモノが菊蕾に押し当てられた。

「ひいっ！ そ、それはいやっ！」

身体が覚えているその感触は、昨夜自分を狂わせた三番目の拡張棒に違いなかった。抗議も虚しく、十分にほぐされたアヌスに黒い責め具が回転しながらねじ込まれていく。

「んあああっ！」

こみ上げてくる圧迫感に、たまたらず上体を色白男の下腹に押しつけてせえせえ喘ぐ。灼けた息を吐きかけられて、ますますいきり立った怒張が美少女剣士の唇をこじ開けてきた。

「くわえてくれよ」

「う、むうっ！」

阻止しようとする舌を巻き込んで、色白男のペニスは喉奥深くに達する。むせ返るような性臭と喉を突かれる衝撃で、嘔吐感が胸を灼く。

上顎の裏側、頬の内側、舌の上。ペニスと接するあらゆる場所がその熱と脈動を感じ取る。今まで生きてきた中でこれほどの屈辱を感じたことはなかった。眉をたわめた苦しげな目元から涙がこぼれて青い仮面を濡らした。拘束された手が悔しげにぎゅつと拳を作る。

その直後、菊蕾も野太い淫具に貫通されてしまう。

「むあうううっっっ!!」

男の股間に悲鳴をくぐもらせて、身悶える白百合の剣士。震える裸身に幾筋もの汗が流

れ落ちる。

上下の口を同時に塞がれ、全身から力が抜けそうになる。しかし少しでも姿勢が崩れると鞭が飛んでくるので、屈辱の体位を崩すわけにはいかない。

「おお……白百合の剣士のお口に……お、俺のが、入ってる、入ってるぞ」

感激して一気に昂奮が増したのか、男は自慢げに観衆に吠えたと、ポニーテールを握って腰を振り始めた。

「うぐっ、むう……ンンッ！」

ガツンガツンと、頭蓋まで揺さぶられるような衝撃。舌や口腔粘膜がめちやくちやくに擦られて、湧き出た唾液が唇の端から溢れ出し、白い喉を伝って落ちていく。

「フム……ン、フウウ……ッ」

呼吸もままならず、小鼻を膨らませて苦しげに喘ぐ真つ赤な顔に玉のような汗が光った。「くくく、チ○ポをくわえた剣士様の顔はなかなか色っぽいな。そら、休まずもつと舌をつかえ」

アヌスには黒い淫具がスムーズに出入りを繰り返している。昨日はあんなに辛かったのに、今はもう子宮を揺さぶるような快感だけが弾ける。どんどん淫らに造りかえられていく自分の身体がブリジットは恐ろしかった。だがその恐怖すらも、おぞましい肛虐に呑み込まれて、虚ろな表情でペニスに舌を絡ませ始める。

「き、きもちいいぞ。もう……出そうだ」

少女剣士の熱い唇に包まれ、色白男は早くも発射の態勢に入った。ブリジットの口の中で肉棒がビクビク痙攣を始める。

(い、いやあつ！)

反射的にペニスを吐き出した瞬間、目の前で白濁が弾け散った。

ドクドクドクッ！

「きゃああつ！」

顔面に思い切り迸りを受けて、仮面の少女は悲鳴を上げた。ネットリと青い仮面を汚した精液が高い鼻梁や顎にも垂れて絡みつく。そして立ちこめる生臭い匂い。あまりの気味悪さに仮面の少女は半狂乱になって首を振りまくった。

「ちっ、途中で吐き出しやがって」

制裁を加えるように、奴隷商人は拡張棒の呪力を発動させた。

「ひああああつ！」

激しい振動に腸管を揺さぶられ、少女剣士はガクッと膝をつく。呪力は昨日使ったときより抑えめだった。もちろん慈悲などではなく、すぐにはイカせず、徹底的に鬨り抜くためだ。とはいえ開発されつつある少女の身体には十分で、その威力を物語るように全身が小刻みに震え、ピンク色に染まった肌にもみるみる汗が浮かぶ。



そのときジワツと腰が熱くなるのを感じて、少女剣士は狼狽えた。尾骨の付け根あたりに熱い塊が生じている。

(……こ、この感じは……!?)

白いお尻に少しずつ赤い痣が浮かび上がってくる。少女の呼吸に合わせて明滅しながら徐々に赤みを増していく。それは奴隷の刻印だった。

(そんな……っ！ だ、だめよ……っ！)

ブリジットの脳裏に昨夜の調教が蘇る。奴隷の刻印をうたれてからの、乱れ方は凄まじかった。性感が数倍に高められた身体は本人の意志をまったく無視して、貪欲に快楽を貪り続け、何度イっても淫欲が消え去ることはなかった。恐ろしいことにブリジットが失神したあとも肉体だけがイキ続けたのだ。

その刻印が今この場で発動すれば領民が見守る中、取り返しをつかない恥を晒すことになるだろう。

(いや……っ！ そ、それだけは……！ ああっ……でも……か、身体が……)

氷を呑んだように冷えていく心と裏腹に、少女の身体は淫具に翻弄されていく。

肛虐に悶える少女剣士のお尻に奴隷の刻印が浮かびつつあるのを見て取って、バスクの目に残忍な光が浮かんだ。

「おい、次にやりたい奴はいないか」

射精後の余韻に呆けていた色白男を追い返し、再び観衆に問いかけた。先ほどよりも明らかにボルテージは上がっており、そこにいる男たちは全員勃起しているはずだ。誰もがもぞもぞ動きながら、互いの様子を窺っていた。淫具に嬲られ、ポニーテールを揺らして悩ましく震える少女の腰は男たちを誘っているようにも見える。

「剣士様は今日、二十人くわえることになっている。協力して早く帰してやりたいと思わないか？ あと十九人だぞ」

ついに巧みな甘言に誘われるように二人が手を挙げた。さらに数名が続く。

「今度は四人同時か。くくく、人気者は辛いな」

嘲るような奴隷商人の声も、今のブリジットには届かなかった。

ほとんど抵抗することができなくなった仮面の少女の手枷が外され、膝立ちの姿勢をとらされる。

「昼過ぎると、治安局が見回りに来るからな。それまでに十九人終わらせないと、血を見ることになるぜ」

「わ、わかったわ……そのかわり、みんなには手を出さないって約束して」

仮面の少女の悲壮な決意も知らず、股間を膨らませた男たちがズラリと並び立った。

「早くしてくれよ、白百合の剣士さん」

目の前に突きつけられるペニスの群れ。無数の毒蛇に睨まれたように少女剣士は怯えの表情を浮かべる。

だが、残された時間はそう長くない。しかも奴隷の刻印が徐々に肉体を蝕んでいる。もはや一刻の猶予もなかった。

屈辱に仮面を震わせながら正面の男根にチロチロと舌を這わせた。男たちの饜<sup>+</sup>えた肉臭が混ざりあって濃厚に鼻を突く。

「手も使わないと、間に合わないぞ」

バスクに指示されおろおろと両手をそれぞれの男根に伸ばす。独特の硬さと弾力が指先に伝わり、気味の悪さに指がすりそうだ。

(でも……い、いそがないと……)

やり方などわからないまま、ゆっくり撫でさする。白い革手袋のぬるつく感触が意外なほど男たちを悦ばせるようで、呻くような声が聞こえてきた。

「おい、こっちも頼むよ」

焦れたようにもうひとりの男が、奉仕を続ける少女の口元に分身を割り込ませる。

「うふ……んんっ！」

唇を完全に塞がれ、呼吸すら困難になってブリジットは苦鳴を上げた。

こうして唇に二本、両手に二本、合計四本の同時奉仕が始まった。

二つの肉棒を何度も往復させられ、根元から先端まで舐めさせられた。右手は肉棒をしがさされ、左手は寧丸を揉まされる。

(ああ……すごい……こんなに……なってる)

手の中でますます大きくなる肉棒に困惑しながらも、なぜか美しい双乳の裏側で動悸が激しく打ち始める。その不思議な情感に突き動かされるように、頭を前後に振って男の欲棒をしごき上げた。

白百合の剣士の献身的な奉仕で早くも正面二本のペニスに痙攣を始める。

「おお、たまらねえ……もうすぐ出るぜ」

昂奮しきった男たちは凶暴性を露わにし、憧れの剣士を汚すために一心不乱に腰を振り始めた。一本は唇を深々と犯し、もう一本は白百合の剣士の象徴とも言える青い仮面にグイグイ押しつけられた。

(いや……こんなの……ひどすぎる)

口の中で、顔の上で暴発寸前の剛直が暴れ回る。顔そのものを犯されるような屈辱。唾液と混じった牡臭がムッと濃くなった

そして唇を犯していた剛直のカロの部分の一段と膨らみ、その直後樹液が噴出した。

ドピュドピュ！ ドクツドクツ！

舌や菌茎に絡みつき、異臭を漂わせる牡のエキスが口いっぱい溜まっていく。





「うむうっ！」

「全部飲み込め。こぼしたら鞭打ちだぞ」

バスクに脅迫されて、ブリジットは毒を飲む思いで飲み下した。喉をゆっくり下っていて生暖かくおぞましい男の体液が、ハッキリとわかる。背筋に悪寒が走り、身体のすべてが汚染されるような気がした。

直後に顔面でも射精が始まる。

「うおお、出る……白百合の剣士の、か、顔にっ！ 出るっ！」

ドバドバドバッ！

「んああっ!!」

撃ち抜かれたように飛沫を散らせながら顔が仰け反った。

連鎖反応のように、両手のペニスもドクンドクンと脈動を始めた。

「ああ……や、やめ……」

悲鳴を上げる間もなく、嘔き出した精液が手袋を濡らし、仮面を直撃した。

「うああっ」

顔中を精液まみれにされ、少女剣士はヘナヘナとしゃがみ込んだ。あまりにも惨めだった。そんな姿を観衆たちに見られていると思うと、死にたいほど激しい羞恥が湧き起こる。一方で、白濁液を浴びた肌に違和感を感じ始めていた。若い肌は水も弾くほどのハリを

持っているのだが、なぜか精液はしっとり化粧水のように肌に馴染んでくるのだ。まるで肌が牡精を吸い込もうとしているようだった。しかも白濁に濡れた部分は異様に火照り出す。

(こ……これも刻印のせいなの?)

精液に濡れ、ピリピリ震え始める指先を見つめながら、自分の肉体の急激な変化に少女は戦慄した。

「ほら、次だぜ」

振り返るといつの間にか男たちが入れ替わり、その後にも列をなして並んでいるではないか。その目は性欲に血走って、ズボンの前も突き破らんばかりに盛り上がっている。もはや表情には同情は見られず、ランドール領随一の美少女剣士を性欲処理のためにこき使うという、歪んだ欲望に支配された飢えたハイエナの集団であった。

「ま、まって……うぐぐっ」

急かされるように口淫奉仕が再開され、口も両手もペニスにすぐに占拠された。

さらにはブロンドのポニーテールを肉棒に巻きつけてしごいている者もいる。

(そんな……そんなところまで!?)

あまりの仕打ちにブリジットは泣きたくなかった。母親から受け継いだ美しい金色。メイが嬉しそうに櫛掛けしていた艶やかなコシのあるロング。それまでも汚されてしまうのだ。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**